

園のおたより



第 8 号

令和7年12月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

サンタクロース

園長 関 由起子

今年もクリスマスの季節がやってきました。早速1組さんのAさんが、「サンタさんに手紙を書いて、持っていってもらったの！」と嬉しそうに教えてくれました。内緒で書いた内容は残念ながら聞き取れませんでしたが、その笑顔から、きっと素敵なお願い事だったのでしょう。2組さんたちも、そっと耳打ちでプレゼントを教えてくれました。正直、昭和生まれの私には聞いたことのないおもちゃばかりで、時代の流れを感じたところです（笑）。

わが家の「サンタクロースからのプレゼントを巡る戦い」は15年も続きました。特に大きな戦いは娘が小学6年生の時、「サンタクロースって本当にいるの？ 友だちのAちゃんが、パパがサンタだって言ってたよ」と言わされたときでした。私は慌てて夫に相談しましたが、「もう潮時だろ。サンタからのプレゼントは止めよう」と、あっさり諦めムード。私は「まだ負けられません」と奮闘。色々な知恵を借りて、「Aちゃんの勘違いよ。サンタさんはいるの。大切なものは、いつも目に見えないものよ」と伝えました。娘は納得し、24日の夜に満面の笑みでサンタさんへの手紙を書いていたのが懐かしい思い出です。

翌年、思春期に入り会話が難しくなった頃。欲しいものを探るのに一苦労で、おそるおそる「サンタさんに手紙、書いた？」と聞いてみると、ムツとしながら「まだ。あ、PC。ノートパソコンが欲しい」と、とても現実的すぎるリクエストが飛び出しました。しかしある日、クリスマスツリーには「バスケットのシャツとパンツをください」という手紙が！ ホッと胸をなでおろし、「ママサンタ」としてガツツポーズをしたのを覚えてています。

そして中学3年生。どのように欲しいものを探るべきか悩んでいたところ、テレビで親がサンタクロースの代わりのプレゼント探しに悩むニュースが流れているではないですか、それも娘の前で。私は慌ててテレビの前に立ち、見えないように塞いでいると、「ママ、もうわかっているから」と一言。そして、この年、サンタクロースからの最後の手紙を添えてプレゼントを贈りました。手紙には「もう大きくなったので、プレゼントはお終いにしますが、いつまでも見守っています。もし可能なら、もっと小さいこどもたちのために、あなたがサンタクロースに時々なってくださいね」と締めくくりました。

先日、我が園のA先生が、サンテグジュペリの有名な「星の王子さま」を貸してくれました。この本には、「大切なものは目に見えない」、「おとなは、みんなかつてこどもだったのに、それを忘れずに覚えている人はほとんどいない」という記述があります。12月は、この大切な言葉をいつも私に思い出させてくれます。



なりきる

副園長 小谷 宜路

2学期も、たくさんのごっこ遊びが、幼稚園のあちらこちらでありました。園庭には、パトロール中の警察や羽田空港発の飛行機が行き交います。潜む忍者や塔から降りてきたラプンツェルも顔を出します。川の工事現場近くには団子屋があり、テラスや室内にはクッキー屋、アイス屋、カップケーキ屋など、開店と閉店が続きました。遊戯室では、大きな乗り物や家の近くで、お化け屋敷や様々なショーが開催されることもありました。さて、こどもたちが豊かに繰り広げていくごっこ遊びについて、かつて担任した保育で印象的だったエピソードを紹介します。

一つ目は、ある年の3歳児です。室内にある大きな積み木で建物を作り、そこに本棚の絵本を全部持ち込んでいる人がいました。友達が「ちょうどいい」と頼んでも、「だめ」と首を横に降るばかりです。お気に入りの絵本があるようで、それを手放したくない気持ちが強くあるようでした。そこで「こんにちは。本屋さん、買いに来ました」「一冊買えますか?」と尋ねてみると、「はい。これ、どうぞ」と、あまりにあっけなく、当然のことのように渡してくれました(一番のお気に入りは手元に置いていたようですが)。3歳児であるその人のままの気持ちでは難しいことも、何かになっている時には、本当にその人になり、気持ちの動かし方まで変わることを実感したエピソードです。

もう一つは、別の年の5歳児3人の姿です。仲良し3人は、園での遊びの多くを、何かになりきってやりとりする遊びに熱中していました(長年人気の、とあるキャラクターがお気に入りでした)。毎日毎日、とても楽しそうではあったのですが、鬼遊びなどルールのある遊びや、もう少し大勢での作り進める遊びに興味を移していく人が増えていく中、3人の遊びがこの今までよいのか、担任として迷いも感じていました。そういうするうち3学期になり、クラスみんなで劇に取り組み始めると、その3人がとても表情豊かな動きと言葉で、堂々と劇をリードしてくれました。劇で役を演じるというよりも、役そのものになっている表現でした。その姿から、なりきる遊びに夢中になることの大切さに改めて気付かせてもらったエピソードです。

来年も、素敵なものになりきって遊ぶこどもたちの姿を楽しみにしたいと思います。ご家族みなさん、どうぞよいお年をお迎えください。

クラスだより



1くみ

「Tu deviens responsable pour toujours de ce que tu as apprivoisé」

チューリップの芽が早くも顔を出しています。もうすぐ冬至ですから、陰が極まり陽に転じます。これから陽が長くなりあたたかな季節に向かっていきます。こどもたちは、チューリップが元気か、ヒヤシンスは水を飲んだか、水槽の小エビはみんな元気か…と毎日よく見てています。土が乾いたら、お水のごちそうをあげて「ゴクゴクゴク。美味しい?」と話しかけています。チューリップの声が聴こえているようにも感じます。ある朝、「せんせい。今日は寒い?」と尋ねた人がいました。それを聴いた人が「今日は寒くなるってママが言ってたよ」「テレビで寒くなるって言ってたよ」と教えてくれました。そして今はどう感じるかと、一緒にテラスに出てみました。「あんまり寒くないね」とはじめの人が言いました。次の人は「でも、ママが言ってたからきっと寒くなるよ」と言いました。その次の人は「テレビで言ってたのに寒くないな」と不思議そうに言いました。

また別の日は、泣く人がありました。それを聴いて「せんせい、○○さん、どうして泣いているの?」と心配してくれる人もありました。「泣いているのは、ママに会いたいからじゃない?」と、ママに会いたいって前に言っていたことを思い出して、泣く人の気持ちを考えたり、予想したりする人もありました。また、ちょっと耳が痛いな、と感じる人もありました。

『星の王子さま』のお話で、地球に出かけた王子さまがキツネに出逢います。そしてさようならをする時に、秘密を教えてもらいます。とても簡単なことだと言い、大切なことは目に見えない(フランス語では"On ne voit bien qu'avec le coeur. L'essentiel est invisible pour les yeux.") こと。また、人間たちは忘れてしまった真理だと言い、なつかせたもの、絆を結んだものには、永遠に責任をもつこと(フランス語では"Tu deviens responsable pour toujours de ce que tu as apprivoisé.") を教えてもらいます。世界中で聖書の次に読まれていると言われている『星の王子さま』の一節です。わたしは、日本語版で読んでいます。原文は、フランス語なので、日本語では表しきれない言葉もあると思いますが、わたしにとって印象的な一節で、幼稚園でのこどもたちの姿と重なりを感じています。



2くみ

「聞いてみよう、聞いてみたら」



日中でも冬らしい寒さが感じられるようになってきました。そんな中でも、こどもたちは進んで園庭に出かけて、忍者になったり、飛行機になったり、パトカーでパトロールしたり、いろいろなイメージで動いてみる姿があります。人が集まって遊んでいると、仲間になっていくやりとりが多く見られるようになっていきます。「入れて」の一言がなくとも、自然と遊びに加わっていけるような雰囲気も心地よく、素敵なものが、言葉でのやりとりを聞いていると、こどもたちがどんなことを思って遊びに関わっていくかを感じられる時があります。

テラスでクッキー屋さんをしているときの出来事です。一人から始まったクッキー屋さんですが、紙粘土や型、ヒマワリの種など魅力的な素材と素敵なお店の雰囲気から、自分もやってみたいと思う人が増えていました。楽しそうな雰囲気に誘われてやってきた人が、元気に「私もやっていい？」と近くでクッキーを作っていた人に聞くと、「Aちゃんが最初に始めたから、聞いてみたらいいんじゃない？」と返されました。そう言われると、Aさんのところに行ってそっと「一緒にやっていい？」と聞きました。「いいよ！」と明快な返事をもらうと、Aさんたちにやり方を聞きながら嬉しそうにクッキーを作り始める姿がありました。「クッキー屋さん」という魅力的な遊びと場との出会いに際して、自分の気持ちを伝えて、まずは聞いてみる。聞かれた人も遊びを始めた人の気持ちを尊重してAさんに聞いてみるように促す。それを聞いた人もAさんの思いがあることを感じ取って、聞いてみる。思いを感じ取って、言葉を交わし合って、関わり出していく姿でした。

いろいろなごっこ遊びをする他に、誰からともなく声を掛け合って多くの人が集まり、鬼遊びが始まることが多くあります。寒い冬の季節が続きますが、たくさん遊んで心も体も温まるような感覚も大切にしています。



3くみ

「自分の気持ちと友達の気持ち」

ある日、くつとり鬼をしていると涙を流しながら遊びから離れ、テラスに座って友達の様子を見ている人がいました。くつとり鬼に夢中になっている人たちはその様子に気が付かませんでしたが、しばらくすると一人が気付き、話を聞きに来てくれました。一緒に遊んでいた人にも集まつてもらい、その人に泣いていた理由を聞くと“鬼なのにタッチされたことが悲しかった”と話してくれました。そこから、みんなで楽しく遊ぶためにはどうすればよいかを考えました。始めは「もうやらない」と言っていましたが、友達が自分の思いを受け止めて、一緒に考え、寄り添ってくれたことで、もう一度、遊びの中に加わっていきました。遊び終えた後には「やっぱりやってよかった。すごい楽しかったよ」と満足気な様子で、話を聞きに来てくれた人も「楽しかったって言ってたね」と嬉しそうにしていました。

また別の日には「先生、困ったことがあるんだよ」と助けを求める声がかかりました。話を聞くと“鬼が走る範囲”について揉めているようでした。ある人は「鬼はばってんのところしか走れないんだよ」、またある人は「それじゃつまらないから白い線の上も走っていいだ」と、どちらも自分のやりたいことをぶつけるばかりでなかなか解決策が思いつきません。やってみる中で何か気付くことがあるかもしれない、と鬼の範囲を広くして試しにやってみました。やってみると「すぐに捕まっちゃうから面白くない」という人や「全然難しくなくて面白かったよ」という人など、一緒に遊ぶ中でもいろいろな思いが出てきました。そこから遊ぶ人が入れ替わりながら新しいルールでもやっていく中で、3組のくつとり鬼では、鬼の範囲を広げて遊ぶことになりました。友達がいるからこそ、自分の中にはなかったアイデアが生まれ、それをみんなで試しながら、自分たちだけの新しい遊び方を考えていく楽しさが生まれていくのだと思います。

遊びや生活の中で、自分が楽しいからそれでいい、と周りを置き去りにしてしまうのではなく、一緒に過ごす友達として互いに気持ちを向け合ながら、みんなが心地よく、楽しく過ごすためにはどうすればよいかと一緒に考える時間を大切にしながら3学期も過ごしていきたいと思います。